

20 August 2006

◆目次

- 芸術家のくすり箱の誕生——才能を花開かせるしくみを創るために必要なこと…………… ①
福井恵子
- NESTAとドリームタイム・フェローシップ・プログラムについて…………… ④
ヴェヌ・デュバ
- 私、新しい自分を見つけちゃいました…………… ⑥
伊藤キム

article—①

芸術家のくすり箱の誕生 ——才能を花開かせるしくみを創るために必要なこと

福井恵子

おもしろい名前ですね、とよく褒められると同時に、一体何をしているのですか、とも聞かれる。「芸術家のくすり箱」は、昨年9月に発足したばかりの新しい非営利サービス団体である。

国勢調査によると、芸術家は約27万人存在し、その職種は様々である。そのうちわずかな例外を除き、多くの芸術家は、脆弱な雇用基盤の上で諸活動を行っており、その社会保障は薄い。つまり、芸術家は身体そのものを商売道具として仕事をする、リスクな職業なのである。同じように身体を商売道具とするアスリートは、たとえばプロ野球やJリーグなどの大型リーグで契約すれば高額な年俸が保証される。また、選手がスポンサーと直接契約をすることも可能だ。「スポーツ医学」も発達しており、身体の危険管理に対する認識は高く、具体的な取り組みも進んでいる。しかし日本では、芸術家のヘルスケアを取り巻く環境は、スポーツ界と比べた場合、かなり貧弱だ。それを少しでも改善するために先例を作っていくのが、「芸術家のくすり箱」である。

事業としては、定期的にセミナーを開催して芸術家の健康管理能力や健康への意識を高める一方、芸術家の運動特性や活動環境に対する医師や治療師等の理解も深めるよう努めている。また、故障を抱えた芸術家に対しては、情報面と資金面からサポートするヘルスケア助成を行っている。

「芸術家のくすり箱」の具体的な活動内容に関しては、ウェブサイトや新聞や雑誌等の媒体で何度か紹介されているので、そちらを参照いただくと、今回は、新しい事業を起こすまでの一連の経緯や、どのように必要な資源を集めたのかなど、組織のマネジメント面を振り返ることで、芸術を支える環境づくりについて考えてみたいと思う。

「芸術家のくすり箱」は1日にして成らず

そもそも、なぜ、このような仕事を始めたのかについてであるが、ひとことで言うとするなら、「必要だから」につきる。しかし、本当の理由はもっと複雑で、とても一言では表しきれない。四半世紀にわたって巡り会ってきたさまざまな出来事や、人との出会いの連鎖によって、必然的に始まったものである。

きっかけは9歳の時のことだ。ある日、親から「バレエは職業にはならないから」と説得され、それまで通っていたバレエ教室を辞めることになった。そのとき私は素朴な疑問を持った。なぜ、外国では職業として成り立たつのに、日本では成り立たないのだろうか。そのときの芸術界の構造に関する疑問が、芸術家の職業環境を整備することへの興味をかき立てたのである。

高校生の時、テレビで「ローザンヌ国際バレエコンクール」の存在を知った。若い才能を発掘し、名門バレエ学校での勉強の機会を与え、人材を育ててゆくという明確な理念と仕組みに、感銘を受けた。いつかそのような仕事をしたいと思った。

大学時代、ダンス仲間の一人が、膝の靭帯を完全断裂するという大ケガをした。才能がケガで失われていく現実を目の当たりにし、ショックを受けた。そして、自分にはどうすることもできない悔しさから、ダンサーのために何らかのサポート体制をつくりたいと思うようになった。

大学の卒業論文を執筆するにあたり、舞台芸術界の構造を知り



2006年7月に開催された、カナダからダンス医学専門家を招いた「Dance Wellness Day」。医師、治療師、トレーナー、ダンサー・指導者等が参加。



2006年3月開催の第1回「ヘルスケアセミナー」のワークショップ。セミナーには1日で100名以上の芸術家が参加した。photo: I. Yoshioka

たいとの思いから、社会調査を試みた。様々な文献を探してみたのだが、当時は、芸術に関するまとまったデータがほとんど見あたらなかった。その中で唯一定期的な定量調査を行って公開していたのが、後の職場となる芸団協（(社)日本芸能実演家団体協議会）であった。そこには、知りたかった舞台芸術界の構造をつかむ手がかりがぎっしりと詰まっていた。

就職には悩んだ。当時は“アートマネジメント”や“メセナ”などという言葉は全く世の中に定着しておらず、芸術界の構造変革を実践する場所は一つも無いように思えたからだ。そこで、いずれ芸術と社会を結ぶ仕事をするならば、まずは社会をみておくべきだと考え、銀行に就職。その後、欠員補充で芸団協に移り、学生時代に出会ったあの「実態調査」を担当することになったのである。

1995年、アメリカの「Volunteer Lawyers for the Arts (VLA)」の話聞いたのだが、その時に「芸術家のくすり箱」の原型を思いついた。弁護士がスキルを用いて芸術家をサポートできるのなら、医者もそうできないものか、という単純な発想だった。

96年から97年にかけて、芸団協で「芸能白書」の編集を担当する。実演芸術に関するさまざまなデータを力業で集めてまとめるという過程では、数多くの苦労がある一方で、さまざまな発見もあった。この編集作業の経験から、長年のナゾだった実演芸術界の構造が立体的に見え始めた。何よりも大きな発見は、その多角的なデータを誰も集約しないまま、つまり、構造把握もなされないまま、日本の実演芸術は動いていた、ということだった。実演芸術をとりまく環境はまさに穴だらけに見えた。

前述のローザンヌ国際バレエコンクールには、当時、日本事業部があり、セミナーを国内で行っていた。その事業部は、一人の女性がほぼ個人のボランティア的な関わりで運営しているものだった。彼女は、いわゆる“バレエ関係者”ではないために、日本のバレエ界の構造をかなり客観的、総合的に理解している希有な人だった。彼女の仕事やセミナーから受けた影響は大きかった。2000年、その彼女に勧められ、仕事を休んでスイスまでコンクールの現場取材に行った。そこでは、会期中に解剖学や栄養学の講座を開催するなどして、身体の健康の重要性を若い頃から植え付ける仕組みが採り入れられていた。ここでの見聞も、後のアイデアにつながっていった。また、ここでダンス界の問題解決に向けた新しい動きも知らされた。それは、職業寿命が短いダンサーのキャリア転換に関す

る国際調査を実施するという事だった。

2001年には、芸術文化振興基本法が成立した。その過程で私は次第に無力感におそわれていった。大きな流れが動くとき、個々の小さな課題は抜け落ちる。いっそ私は治療師になって、世の喧嘩から逃れ、ひとり一人の芸術家を直接助けたい、という思いにかられた。

同法で「芸術家の地位の向上」がうたわれたのは大きな前進だったと思うが、それに関する新しい具体策はいまだ何一つ出されていない。それなら、一つでも二つでも、実際に芸術家を救う事例を、構造的解決策につながる事例を作れないものだろうか。本気で新しいプログラムを考えるようになった。

2002年には、ニューヨークのコロンビア大学芸術文化研究所で短期研修の期間を過ごした。ここが奇遇にも、2年前にスイスで書いた、ダンサーのキャリア転換の国際比較調査の調査本部になった。しかし、キャリア転換という問題は、日本には当てはまりにくい。なぜなら、日本ではダンサーはほとんど雇用されておらず、定年という形の引退が無い。また、ダンスの中でも日本舞踊は欧米のダンス界の常識と比べて著しく現役寿命が長いし、90歳を過ぎても舞台に立つ舞踏家だっている。そもそもキャリア転換よりも前に、キャリアというものが果たして確立しているのか。そちらの方がはるかに切実な問題なのである。したがって、私がアメリカで何を学んだかといえば、その調査の結果やキャリア転換対策のレシピではなく、そのようなひとつ一つの課題に対して専門の非営利サービス団体があるということ、そうしたサービス団体の総体が構造を支えているのだという米国の現実であり、アートに限らず非営利団体すべてに存在するポジティブな姿勢であった。足りないモノ、必要なモノを補うための専門機能をどんどん作り、それに対する支援を絶え間なく訴え続け、支援に感謝し、活動の輪を広げていく。過去の苦労を、未来を支える仕組みに転換する。日本の芸術界に足りないのは、そうした利他的動機の高いポジティブな行動の連鎖ではないか、と気づいた。実際に現地で知った、アクターズファンドのボランティア医制、ダンサーの専門クリニック、ダンサーのキャリア転換の支援機関などは、直接間接に「芸術家のくすり箱」のアイデアの元になっていった。

2003年に帰国してからは、「芸術家のくすり箱」構想の輪郭を固めていくと同時に、組織運営の人材、さまざまな協力者を集め始めた。アーティストの身体に詳しい研究者やプラクティショナー、人事・労務経験者、保険のエキスパート、ファンドレイザー、弁護士等、志を共有できる面々がリンクし始め、出資を申し出してくれた友人と共にブレンストーミングを繰り返しながら「芸術家のくすり箱」のプランを作っていた。2005年には独立を決め、後述する公開起業オークションに出場、多数の支援者を得て事業を開始することとなった。

長くなってしまったが、どの出来事一つとっても、最終的に「芸術家のくすり箱」につながる要素として欠かせないため、漏れなく書くことにした。

まずは、芸術関係者から離れたところに行く

ただでさえ、芸術分野に流れるお金の量は限られたものでしかない。その小さなパイを取り合っているにもかかわらず、私はなる

べく芸術関係者が居ないところに行くことにした。たとえば「一新塾」という政策提言や社会起業の人材輩出をめざす非営利団体である。2003年11月から1年間、私はその社会起業家コースに在籍した。そこでは芸術分野を扱う者などただ一人。しかも、女性は約1割と少数派。というわけで、私は勞せずして色物となり、多くの人に自然と名前を覚えてもらったようだ。結局、塾には通いきれなかったのだが、ここで一番の収穫は、「芸術家のくすり箱」の保険事業の核となる人物と出会えたことだ。また、塾が出版した書籍の中で、設立間もなく実績もない「芸術家のくすり箱」を紹介していたくという機会にも恵まれた。

さらに、東京ソーシャルベンチャーズの投資対象にも応募した。これは、20歳～30歳代の若者が中心に、一人10万円ずつ出資し合ってファンドを作り、自分たちで社会起業家に対する出資先を決めるというものである。2005年第1回の募集で、「芸術家のくすり箱」は最終審査に進んだ3つの団体に選ばれた。しかし出資先として採択されたのは「芸術家のくすり箱」以外の2つの団体であった。それぞれ病児保育と多文化共生を扱う団体だったが、課題の緊急性という点でその2つにかなわなかったそうである。その点では確かに、芸術は永久に、人権、環境、平和、福祉、教育などというテーマにかなわない。だからこそ、気づいた人が何かを始めない限り、構造は変わらないのだと改めて認識した。結果は残念ではあったが、さまざまな気づきを与えられた良い機会であった。また、ここで知り合った出資者の中から数名が、「芸術家のくすり箱」の個人的支援者へとつながっていった。

人はアートを必要と認めている—希望が確信に変わった瞬間

「芸術家のくすり箱」の立ち上げ時にもっとも大きな資金源となったのは、WWBジャパン(女性のための世界銀行)の「公開起業オークション」である。これは2ヶ月にわたる起業実践講座の最後に行われたもので、来場者約150名の前で事業プランを1人5分間で発表、起業に必要な「人」「物」「金」の経営資源を募るというものだった。最初に「人」「物」「金」いずれかの目標値を掲げ、それをクリアできない場合は、いかに多数の賛同者が出ようとも、その資源はもらえない、というルールである。芸術関係者以外に「芸術家のくすり箱」のような、抽象的で目に見えないものの必要性やコンセプト、事業性をアピールすることは、容易ではない。事務局の人にも「オークションに出すのは難しいのでは」と言われたほどだった。その前年のオークションでの最大の成功者は、1口5000円の会員権32口を獲得し、新聞にも大きく採り上げられていた。これを超えるインパクトを得なければ、まず新聞に載ることはないだろう、ということ。さらに、来場者に出資を約束している友人を入れれば目標値をクリアできるだろうという計算のもと、私は1口5000円の寄付を100口、という目標値を出した。果たして「わかりにくい」くすり箱が、5分でどれだけ理解されるのか、財布を開いてもらえるのか。不安は大きかった。だがフタをあけてみれば寄付の申し出は232口、WWBジャパンの新記録であった。多くの人が、芸術家の存在価値を認め、応援してくれる。その希望が確信に変わった。だいたい芸術など社会から浮遊した飾り物程度に思われ、なぜそれが必要かという前提から説得しなければならぬのが常なので、それは本当に嬉しい驚きだった。まだ見ぬものに託してくれる人々の気持ちのあ

りがたさは忘れられない。

ただ、この結果は運を天に任せていたわけではなく、そのための仕込みはコツコツと行っていた。WWBジャパンが開催される5年ほど前から、様々な会合で名刺交換をさせていただいた後、「マイリスト」をつくっていた。その300ほどのリストへのよびかけが、オークションの応募者につながったわけだ。また、5分間という短いプレゼンの構成も熟慮した。短い時間では人は理論よりもストーリーに反応しやすい。したがって、プレゼンは平易な言葉で、実話を交えながら感覚に訴えかけるようにした。合わせて、それまでの仕事で知り得たデータを盛り込み、説得力も深めるようにした。さらに全体を通して、何を売りたいか・何が欲しいか、ではなく、どんな社会にしたいのか、というポジティブなメッセージ性を打ち出すように意識した。そして、これまで名前も顔も出すことをなるべく避けてきた地味なキャラクターを補うために、スパンコールのついた光る服を着た(?)。

名も無き小さな団体が信用と協賛を集めるために

私たちのように名も無き小さな団体が、人の信用とお金を得るための方法に奇策などはなく、地道な努力と知恵が必要だ。前述の公開起業オークションは例外的なビギナーズラックであり、2回は使えない手だと思う。

「芸術家のくすり箱」が意識しているのは、地道で着実な「初もの」としての話題づくりである。無理にお金をかけなくても、発想次第で実現できる方法だ。たとえばWWBジャパンでのプレゼン、健康診断がついたセミナーを開催するというアイデア、芸術分野というよりも社会起業という立ち位置に身を置くこと、ヘルスケア助成対象者を公募すること、海外関連機関との関係構築、他団体との提携などであり、情報のリリースには毎回何らかの形で独自性をうたえるネタを入れるようにしている。これから先のネタもいくつか考えているところだ。

「初ものネタ」を積み重ねた結果、日本経済新聞、東京新聞などに取材記事が掲載され、関係者のブログやウェブサイトにも紹介されたりして、それが信用につながり、セミナーの参加者や賛同者が広がった。また、雑誌「Dance Dance Dance」(フラックスパブリッシング)編集部に対し連載企画をもちかけた結果、場を与えて



身体をよく使う芸術家とそのマネージャー向けのテーピング講座。少人数制の丁寧な指導で、現場に役立つと好評だった。

いただくことができた。医科学方面には雑誌「Sportsmedicine」「Training Journal」(共にブックハウスHD)へアプローチして、治療師等からのアクセスが広がった。

立ち上げ早々、8社からも協賛を得られたのは珍しいと言われていた。そのうちひとつは、知人の紹介によるいまの事務所の社長とのご縁である。電話番号オペレーターを探す先方と、事務所スペースを求める当方とのニーズが良いタイミングでマッチして以来、ご厚意に甘えてしばらく机をお借りしている。あとは企業メセナ協議会の助成認定を得て、「芸術家のくすり箱」メンバー個人の伝手をたどってお願いに上がった会社、公開起業オークションで賛同してくれた方の会社などだ。大口の協賛者はなく、金額的には当初の目標に遠く及ばなかったが、クレジットに企業の名前が連なることで、私たちが得た信用面のメリットは大きい。

そのほか、ウェブサイトからも随時会員や寄付を募集しており、あまり営業活動ができていないにもかかわらず、申し込み者が当初の見込みを上回っている。

今年度ははいよいよセゾン文化財団の支援をいただくことができた。事業単位の資金調達だと長期計画が立てづらいのだが、プロジェクト全体に対する支援ということなので、非常に有り難く思っている。

「芸術家のくすり箱」の財産と課題

これまでは、幸いにも理解ある人々に支えられ、比較的恵まれたスタートを遂げてきたと思う。しかし、一度始めてしまったら、それを継続させ安定させなければ、本当の意味で「サービスを立ち上げた」とは言えない。その基盤を作ることはこれからの大きな課題である。

「芸術家のくすり箱」のように、高い専門性と忍耐力を要するプロジェクトは、人材が集まらないと、その実現も継続も難しい。幸いなことに、物理的な資源に乏しい私たちに、唯一恵まれているのは、この人材の部分だと思っている。

今後は、セミナーやヘルスケア助成に加え、保険商品の開発や、医療機関との提携などを視野に入れて活動を進めていきたいと考えている。いま、世の中は個人事業者やフリーランス的な位置づけの人が増え、そのような人たちの社会保障が課題となってきている。そして、医療財政の逼迫により、治療よりも予防に重点が置かれるようになってきている。このような世の中の流れは、社会保障のうすい人を含めたヘルスケアの強化や、予防に力を入れたプログラムの開発を行う私たちの事業内容と、方向性が合致しているといえる。うまくプログラムが作れたら、芸術分野内での取り組みを、逆に外の社会に応用できるようになりたいものだ。また、公益法人制度改革が進む中で、私たちの事業にもっともふさわしい法人形態が何かということも常に勘案し、適応しながら活動していきたいと思う。

日本の実演芸術界は、たとえて言うなら、花を楽しむために、花器だけをあちこちに作ってきて、日持ちのしない切り花を買っては日替わりに活けていたような時代が長かった。しかし、花をより長く深く楽しむためには、土、空気、水、光、流通、バイオテクノロジーなど、目に見えないさまざまな環境づくりへの投資が必要だ。それらを整えることは、法律や制度だけでも、小さな民間団体の力だ

けでもとうていいなしえない。

文化政策やマネジメントを学べる教育機関が出来はじめて15年。もうそろそろ、そうした環境を整えるための取り組みが、もっとさまざまな形で動き始めて欲しいと思う。それらが連動して大きなうねりとなったとき、日本の芸術環境は進歩していくのだろう。



福井恵子(ふくい・けいこ)

お茶の水女子大学文教育学部卒。信託銀行員を経て(社)日本芸能実演家団体協議会に勤務。「芸能白書」「芸能実演家の活動と生活実態調査」「舞台芸術の鑑賞行動」等の企画・制作に関わり、舞台芸術界の基礎統計整備に貢献。02年度文化庁派遣によりコロンビア大学芸術文化研究所にてダンサーのキャリア転換に関する国際比較研究(aDvANCE Project)に参加。多数の舞台鑑賞や芸術関係者との交流を通して、「誰も着手していない、必要なサービス」を立ち上げようと思いつき、05年に独立し「芸術家のくすり箱」を設立。
(<http://www.artists-care.com>)

article—2

NESTAとドリームタイム・フェローシップ・プログラムについて

ヴェヌ・デュバ

芸術文化の領域でユニークな支援活動を展開している世界の機関・団体を紹介するシリーズの5回目。今回はロンドンに拠点を置くNESTA(英国科学・技術・芸術基金)の「ドリームタイム・フェローシップ・プログラム」について、フェローシップ部門の前ディレクターだったヴェヌ・デュバ氏に寄稿していただいた。(編集部)

はじめに—NESTAについて

この度セゾン文化財団より「ドリームタイム・フェローシップ」について日本の皆様にご紹介する機会を得られて嬉しい限りです。

それでは最初からお話しましょう…NESTA(ネスタ)はNational Endowment for Science, Technology and the Arts、すなわち英国科学・技術・芸術基金の略称です。英国議会法に基づき、国内のクリエイティビティー(創造性)とイノベーション(革新)を支援し、促進させてゆくことを目的に1998年に設立された機関です。基本財産は約3億ポンド[訳注:約630億円/1ポンド=210円換算・以下同様]で、低リスクの公社債や株に投資されています。その運用益と、他の組織から受けた小額かつ単発のプロジェクト単位の助成金を合わせた収入から、年間約2500万ポンド[約52.5億円]を表彰活動と経常費に充てることが可能となっています。

NESTAでは知識と実践の境界線を押し広げてゆくあらゆる先駆的なプロジェクトや個人および製品とサービスを支えるいくつか草分け的なプログラムがございます。革新性は、分野と分野の間

やその融点、またはある専門家が媒介の役割を担い、自分の専門外の分野を刺激してその発展を促すような状況などにおいて起こる可能性が高いとNESTAでは考えています。NESTAが英国の助成機関の中でも際立った存在となっているのは、そうした考えに基づいて展開されている、多分野にまたがった活動を行っているからです。また、投資〔訳注：原文ではinvest (investment)。本稿では一応「投資」と訳したが、事業活動などに対し収益を目的として出資する、通常の意味での投資とは異なる。本質的には支援なのであるが、単なる慈善的な意味合いの援助ではなく、社会に対する明確なリターンを期待していることを強調するため、この語が用いられている。〕した先が将来成功した場合、配当金などの利益の受け取りが認められている唯一の行政機関であることもユニークです。しかしNESTAによる支援の目的は、商業的な発展だけでなく、ホリスティックかつクリエイティブな発展を遂げることにあります。現在までに1000以上の賞や投資事業を通じて5000万ポンド〔約105億円〕以上を支給して参りました。

NESTAのフェロースhip・プログラム

フェロースhip・プログラムは、NESTAによる投資活動の「理想主義的」な側面の代表例の一つです。同プログラムの目的は、科学・技術・芸術の3つの分野すべてにわたって、才能ある個人による創造的発展を支援することにあります。新しい実験的なモデルの開発に取り組んだり、採択された対象者への助成金をダイレクトに支給したり、またはその他の知的開発や実践的なトレーニングに参加する機会を提供することによって実現しています。フェロースhip・プログラムは、コンセプトの有効性が証明される以前の、まだ初期段階にあるアイデアに投資するNESTAの意欲を反映しています。そのため、対象事業が抱えるリスク、そして予想される利益が出るまでの5年から10年の間（場合によってはそれよりも長く）にわたる、長期モニタリングの管理責任がNESTAに要求されます。フェロースhip・プログラムの助成金額の範囲は1000ポンドから7万5000ポンド〔約21万円から1570万円〕までとなっています。まず対象者を選び、それから資金面と創造性の部分での支援方法を各対象者にとって最適形で組み立てます。さらにNESTAからは、助成対象者のガイド役となるプログラム・マネジャーとメンター（助言者、指導者）を提供し、対象者にとって重要な節目に合わせて助成金を支給する方法を取っています。

ドリームタイム・フェロースhip・プログラム

私はフェロースhip部門のディレクターを5年間務めて参りましたが、当初システム系とアカデミックな面が強かった同プログラムを、産業界および各助成対象分野のニーズに沿うように方向転換を図るためにリクルートされました。その結果、私が率いたチームによって新たに5つの表彰部門が導入・開始され、そのうちのひとつが「ドリームタイム」でした。私の略歴をご覧いただくとお分かりになると思いますが、私は芸術の世界において、実践家として、また管理者や世話役として、さらに政策立案者としても活動して来ました。そのような経験から、芸術界で幅広く活躍しているトップレベルの人たちが、日々の雑務から離れ、情熱を持って取り組める特定の何かに集中し、追究してゆく時間を見つけることはまずあり得な

いと分かっていました。しかし、そのような機会が与えられれば、芸術家個人だけでなく、その活動分野にとっても、大きな収穫になるのは間違いありません。これは以前、科学の分野で行ったリサーチでも確認したことで、既存の研究諮問機関を通して支給される拘束力の強い助成と比較すると、個人に対して直接支給する助成金の方が結局その分野にとっても効果的でした。また、技術分野に見られるような、小規模のプロジェクトチームにおける極めて活発な環境の中で活動する個々の専門家の例でも明らかでした。

当初「オネイロス」（ギリシア語で「夢」の意）と呼ばれていたドリームタイムは、専門分野において10年以上の経歴のある個人を対象に2002年より開始されました。年間4万ポンド〔約840万円〕を上限に申請が可能で、用途について出来る限り柔軟に対応できるようにしました。また、一年中行うフルタイムの活動でも、あるいは短期または有給休暇中に行う活動でも助成金を使用することを認めました。自己開発型のプログラムであるものの、対象者本人とその専門分野の両方にメリットがあるべきだと考えました。また、NESTAからの助成金を補う意味で、キャリアのある個人であればすでに充実したネットワークを構築しているだろうという前提で、申請者はNESTAへの申請額の10パーセントにあたる額を他の資金源から集めることになっています。さらに申請の際には次の点を明示する必要があります：

- 極めて優秀かつ完成度の高い業績を残していること
- 一連の代表的な仕事／作品があること
- 斬新かつ挑戦的な方法で仕事をする力があること
- いまこそが「夢を見る」のに最適な時期であるという適時性
- 自分の専門分野ならびにこれから探求しようと試みている領域に対する責任感
- ドリームタイムのプログラムによって発見したことを将来還元してゆくための計画

この他に、一般的に賞を授与する際に用いる選考基準——例えば卓越性、責任感、創造性、革新性、期待度、有用性、そして費用対効果——にも照らし合わせて審査します。

こうしてみると選考基準がたくさんあっていかにも手間がかかるように見えますが、私たちは申請者が自分について語る言葉に耳を傾けながら、それぞれの基準を満たしているかどうかを決めることにしています。彼らは何がしたいのか？ 何故それをしたいのか？ いつ、どうやってやるのか？ 金額的にいくらかかり、自分そして他者にとってどのようなメリットがあるのか？ 豊かな感受性と洞察性、そして挑戦的な性質を合わせ持つこの申請過程に対して、われわれは常に高い評価を受けてきました。また申請者たちによると、創造性豊かな専門家が自身の高い目標について納得の行くまで表現できるこのプロセスに、真の懐の深さを感じるそうです。

この賞の競争率は高く、初年度には採択件数6件に対し300件の申請がありました。3年度目には採択件数15件のところ、申請件数が1000件近くありました。これまでに31の個人に対して合計120万ポンド〔約2億5200万円〕出資してきました。なお、現在はNESTA全体における他の戦略の見直しと併せて、同プログラムの評価を行うために申請の受付を一時休止しています。ドリームタイ

ムの休止に対して数多くの反響が寄せられ、ニーズの高さが証明されましたので、きっとプログラムとしての再出発も実現すると思います。ドリームタイムによってNESTAは国内外から注目を集め、さらに対象となる科学・技術・芸術の3分野からは貴重な機会を与える賞として認められています。外部によって行われた評価の結果でも、NESTAが多分野にまたがる卓抜なリーダーたち、そして“チェンジ・エージェント”、すなわち改革者たちを輩出してきたという結論を導き出しています。

過去の主な対象者をご紹介します。

■ジュード・ケリー (Jude Kelly)

大英帝国第3等勲爵位 (CBE)。英国の代表的なアーツセンターの現芸術監督。ウェスト・ヨークシャー・プレイハウス劇場の前CEO (最高経営責任者)。ロンドン2012文化教育委員会 (London 2012 Culture and Education Committee) 会長、ブリティッシュ・カウンシルのボード・メンバーも兼任。ドリームタイム・プログラムの支援を受けて、「リーダーおよび政策立案者としての芸術家の役割」について調査し、その活動を通じて、自身の改革と実践を促進する才能と力量に確信を得ました。

■スティーブ・グラント (Steve Grand)

独自に研究活動を行っているフリーの科学者。バス大学客員教授。かつて「英国で最も優秀な頭脳を持つ男」といわれた人物。ドリームタイムでは神経系のネットワークを通じて簡単な選択を行い、人間の腕とほぼ近い動きで自らの意志でバナナやオレンジを取り上げる知的ロボットLUCY (ルーシー)を開発しました。

■アンジェラ・デ・カストロ (Angela de Castro)

世界的に有名な『スラヴァのスノーショー』のツアーにも参加したことのある、英国の代表的な女性クラウン (道化師)。ドリームタイムではロシアとイタリアのクラウンの歴史における女性クラウンによる貢献、および現代社会におけるクラウン芸術のインパクトと今後の可能性について調査しました。

■フィル・ミントン (Phil Minton)

ヴォーカリスト／ヴォイスパフォーマー。ドリームタイムでは野生動物の声を模倣した発声法など世界中のヴォイス・テクニクを調査し、2つの音声を同時に出すトゥヴァの喉歌 (ホーメイ)の合唱団からリオデジャネイロのスラム街に住むストリートチルドレンまで、あらゆる人々とともに活動を共にしました。

■グラーム・ジョーンズ (Graham Jones)

科学の難しい題材や問題を専門家以外のさまざまな聴衆に語りかける活動を行っている、サイエンス・コミュニケーションの先駆者として知られる型破りな科学者。ティーンエイジャー向けの「サタデー・ナイト・サイエンス」や、ショッピングセンターを会場に行う「消費セラピーの科学」といった双方向型セミナーを実施しています。

これらの対象者はそれぞれに驚くべき才能の持ち主であり、一人ひとりがこうして成功していることをとても嬉しく感じます。

おわりに

この度私は、ロンドンのアーツセンターであるサウス・バンク・セ

ンターにおける「クリエイティブ・イノベーション・ユニット」という新しい部門の設立責任者に就任することになり、この夏でNESTAを離れます。もしドリームタイム・フェローシップ・プログラムやその他に私が携わってきた事業についてご質問がございましたら、私の連絡先をセゾン文化財団にお尋ねいただければ幸いです。こうして皆様に、私がこれまでに取り組んできた仕事についてご紹介できる機会を設けてくれた同財団に感謝申し上げます。ドリームタイム・フェローシップ・プログラムに対して、また同プログラムを通して国宝級の才能を持った人々に過去5年間にわって手厚い支援を差しのべ、それによってあらゆる分野から高く評価されてきたことを、私は改めて誇りに思っております。

(翻訳：編集部)



photo: Thomas Branch

ヴェヌ・デュバ (Venu Dhupa)

NESTAのフェローシップ部門の前ディレクター。2006年7月よりサウス・バンク・センターの新部門「クリエイティブ・イノベーション・ユニット」の設立プロジェクトに参加。これまでにノッティンガム・プレイハウスのエグゼクティブ・ディレクターやロイヤル・ナショナル・シアターの移動ツアー部門のプロデューサーを歴任。現在シアター・トラスト評議員、ギルフォード舞台芸術学校理事、ラフバラ大学委員会メンバー、ロンドン2012文化教育委員会メンバーなどを兼任。2005年には「文化リーダーシップ」の問題についてリスボンの欧州文化議会にて、また「創造性と検閲」についてバーミンガム、そして「芸術における多様性と民主主義」というテーマについてスウェーデンでそれぞれ論文を発表。これまでの芸術と文化に対する貢献が評価されて、英国の「アジア女性功労賞」を受賞。

article ③

私、新しい自分を見つけちゃいました

伊藤キム

セゾン文化財団では、昨年度から「サバティカル」と銘打った新プログラムをスタートさせた。このプログラムは、長く第一線で活躍してきたアーティストや専門家に、しばらくの間、海外でリフレッシュしてもらうことを目的としている。何かをそこでする義務は一切ない。条件は、仕事に関係した活動をしないということだけである。異文化の中でゆったりと自分のキャリアを見つめなおし、今後の活動に思いを馳せる機会にしてもらえれば、と考えている。第一回目の旅人は、振付家・ダンサーの伊藤キム氏。半年間にわたる世界一周の旅について報告していた。

(編集部)

ダンスを捨てよ、旅に出よう

2005年10月12日、私は世界一周の旅に出た。荷物は14kgのバックパックに小さめのリュック。北京を皮切りに、中央アジア、コーカサス、トルコ、ヨーロッパ、モロッコ、中南米、アメリカと回り、4



中国・麗江近郊の村・白沙。道端のお店の前で（本文中の写真はすべて筆者撮影）

月22日に帰国した（詳細はp. 8-9の地図とデータを参照）。ダンスの仕事での海外ツアーは多いが、こういうバックパッカー旅行は初めてだった。

今回の旅にはコンセプトがいくつかあった。地球を西に向かって一周する。できるだけ行ったことのないところを訪ねる。冒険好きとしては、未知の土地に惹かれるのだ。危険な地域、寒い場所、大きな海などを越える場合は飛行機だが、基本的に列車かバスを利用。でも無理はしない。おおよそのルートは決めるが、宿や交通手段はガイドブックを参考にそのつど選ぶ。ホテルは一つ〜二つ星。節約しつつたまには贅沢もする。期間は半年前後。一年は長すぎるし、かといって2〜3ヶ月じゃ短い。いくら冒険好きとはいえ、寒いのが苦手な私のとったルートは、中南米を除いて、東京をそのまま横にずらした北緯30〜40度近辺に集約されていた。

実は私、外国が嫌いなのだ。いや正確には、昔ほど外国に興味を持たなくなった。じゃあなぜ世界一周などを思い立ったのか？

1997年に古川あんずの下で踊りを始めて以来18年、いろんなことをやってきた。ソロ活動、他のアーティストとの共同作業、カンパニー「伊藤キム+輝く未来」の創立、小スペースでの実験的公演、立派な劇場での大規模な公演、屋外スペースでの遊園地のような試み、ワークショップもプロ・素人を問わず、大人から学生・子供までさまざま。やりたいことだけをやりたいように、好き勝手にやってきた。そうやって実績を積み上げ、いい評価も受けた。これほど幸せな境遇は滅多にないだろう。そんなこんなで、世の中の辛苦を味わうような苦勞をしていないから、年令よりも若く見られるのである。

だがここ数年、仕事量と種類が増えるにつれ、アイデアも枯渇し、出てくるものがマンネリ化しつつあった。そして徐々に作る喜びが薄れ、ついにはダンスに新鮮味を感じなくなってしまっていたのだ。

それならということで、長期休暇でリフレッシュしようと思い立った。山奥にこもるとか、海外へ研修に行くとか、方法はさまざまだ。でもど

うせなら、面白いことをドカンとやりたい。そこで、ダンスを始める前の学生時代に「いつか世界一周旅行をしてみたい」と夢見ていたことを思い出した。チャンスは巡ってくるものだ。なにせ小学生の時の夢が、外交官になって世界中を飛び回ることだったから。

芸術の世界では「文化庁在外研修員制度」というのがあって、ダンサーや演出家、俳優、音楽家などが普段の活動を離れ、税金を使って海外研修する制度がある。この方法も選択肢のひとつとして考えられるが、私に言わせればこれは所詮「敷かれたレールの上を辿る」作業であり、目新しい発見は期待できない。実際活用したことはないのだからなんとも言えないが、あまり魅力は感じない。「冒険好き」としてはやはり、何も責任を負わず何も考えなくていい「フラフラヘラヘラダラダラ旅行」を選択してしまうのだ。

実は「いつか長期で休む時間を持たなくちゃ」というのはここ数年感じていたことだったが、なかなかタイミングを掴めないう。この時期にそれができたのは、その年に40歳代に突入した、15年住み慣れた場所から引っ越した（それまでは賃貸だったので、長期で家を空けるのはワリに合わなかった）、など、個人的な環境の変化によるところが大きいように思う。人生、何事もタイミングなのである。

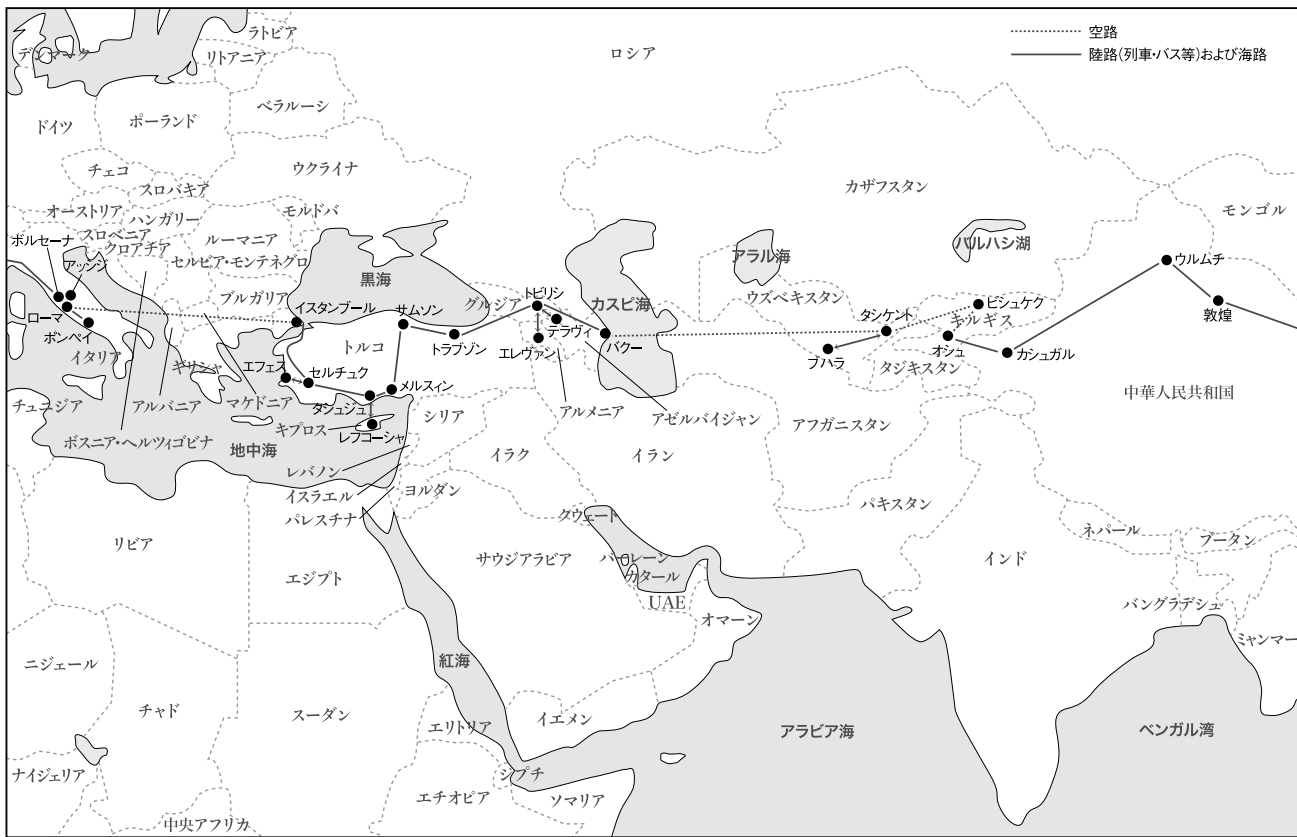
で、半年間、何を見たのか？ ざっくりいえば、自然、生活、宗教、歴史、そして貧困である。普段はダンスという日常に忙殺されて目に入らないものばかりだった。旅で出会ったエピソードをいくつか挙げてみよう。

故郷と私

12月中旬、旧ソ連のグルジア。なだらかな丘陵にぼつんと佇む、グルジアワインの名産地のテラヴィという田舎町を訪れた。いつもはごく普通の安宿だったが、テラヴィではホームステイにした。宿泊がホテルだと、食事はレストランで済ませ、日中は街を巡ったりするのが主体で「観光」という気分だが、ホームステイだと「滞在」という感じになる。その家の住人との会話や情報交換があり、心のこもった家庭料理などが味わえて、人間臭い日々が送れる。



中国・カシュガル。縁台でつろぐじいさんたち





旅のデータ

総日数： 193日
 訪れた国の数： 18ヶ国
 足を運んだ街の数： 52ヶ所(うち宿泊した所40ヶ所)
 泊まったホテルの数： 58ヶ所
 バスに乗った回数： 20回(うち夜行8回)
 列車に乗った回数： 19回(うち夜行15回)
 飛行機に乗った回数： 10回(うち夜行2回)
 船に乗った回数： 4回
 (交通機関は宿から宿の移動に限る。観光で使ったものは除外)

最も物価の安かった国： アルメニア
 最も物価の高かった国： アメリカ
 (交通手段やホテルのランク・宿泊日数などが国によってまちまちなので、純粋に客観的なデータにもとづいてはいない)

足を運んだ街は…

中国： 北京、上海、桂林、昆明、麗江、シャングリラ、西安、
 敦煌、ウルムチ、カシュガル
 キルギス： オシュ、ビシュケク
 ウズベキスタン： タシケント、ブハラ
 アゼルバイジャン： バクー
 グルジア： トビリシ、テラヴィ
 アルメニア： エレヴァン
 トルコ： トラブゾン、サムソン、メルスィン、タシュジュ
 北キプロス： レフコーシャ
 トルコ： セルチュク、エフェス、イスタンブール
 イタリア： ローマ、ボンベイ、アッジジ、ボルセーナ
 フランス： ニース、アルル
 ポルトガル： リスボン
 スペイン： グラナダ、アルヘシラス
 モロッコ： タンジェ、マラケシュ、ワルサザード、ティネリール、
 メルズーガ、フェズ
 チリ： サンチャゴ、カラマ
 ボリビア： ウユニ、ラ・パス
 ペルー： クスコ、マチュピチュ、リマ
 メキシコ： メキシコ・シティ、ティファナ
 アメリカ： ロサンゼルス、サンフランシスコ

このテラヴィで私を迎えてくれたのは、仕事を引退したご主人と学校教師の奥さん、そして24歳の娘ソフィア。食事はすべて奥さんの手料理で、ジャムなども自家製だ。ご主人手製のハムも出る。

この家で私が出会ったのは、「家族」という当たり前の光景だった。到着した日の夕食時、娘のソフィアが言った。「乾杯の時に何を告げるかを決めるのは父なんです。父が食卓の主なんですよ」。そういえば私が幼い頃、元旦には必ず、神棚のある座敷に家族が集まり、父を前に皆が並んで正座し「昨年一年間、お世話になりました。今年もよろしくお願ひします」と頭を下げたものである。かつて日本の父は強かったのだ。

彼女は続ける。「私はここに生まれ育ち、今は家を出て近くに住んでるけど、ここを離れるつもりはない。家族や隣人、そしてこのテラヴィが大好きなんです。私が「日本の都会では、隣人と顔を合わせてもあいさつもしない人が多い」と言うと、目を丸くして信じられないという表情で「どうして？ そんなのここじゃ考えられない」。ソフィアは歴史の知識も豊富でしっかりした女性だ。「でもね、古いものに縛られたくはない。私には私の生き方があるし」。そして「父の前ではタバコは吸わないの」。古風と現代がバランスよく解け合った、可愛気のある女性だった。

ふるさとを離れひとりで暮らす私にとって、テラヴィはしばらく

疎遠だった家族、家、故郷を思い起こさせる場所になった。この旅は一見、特別な行事のように見える。でも実際は、当たり前なモノやコトに出会う日々だったのだ。

宗教と私

イスラム圏である中央アジアやアゼルバイジャン、トルコ、モロッコでは街にモスクがそびえ、ヨーロッパでは教会がデンと構える。それらは遺物として忘れ去られているわけでは決してなく、市民の日々の生活と密接に結びついている。発展途上国では特にそうだ。グルジアの首都・トビリシでは、街行く人は教会の前でふっと立ち止まり、尖塔に向かって十字を切る。イスラムの国々では、早朝から夕方までの一日五回のお祈りを欠かさない。モロッコでは、砂漠のど真ん中で、小さなじゅうたんの上に跪き、メッカに向かって額を地面に押し付ける人がいた。街はずれの砂漠、放牧の途中、近くにはモスクなどあるはずもない。まるで映画の一場面を見ているようだった。

宗教は、人間の心を支える道具・システムとして機能する。そして文明化が進むとそれにとって代るものが現れる。技術、機械、つまり科学である。アジアからヨーロッパに向けて旅を進めるにつれ、宗教度は薄れ、文明度が強くなった。たまたま「発展途上国から先



グルジア・トビリシ。地下鉄車内

進国へ」という経路だったからだが、未だ文明に押し切られていないエリアの人々にとって、宗教は明確に「心のよりどころ」として機能している。

そして現代日本に住む私にとって、「心のよりどころ」とはなんだろう？ いやそもそもそんなものは存在するのだろうか？ 旅の間じゅう考え続け、今も思い巡らすが、それは私の周囲のどこにも見当たらない。

歴史と私

中国の次にキルギスやウズベキスタンを目指したのにはワケがあった。中央アジア一帯に広がる「スタン」の国々に行ってみたかったのだ。東南アジアほど馴染みはないし、中国のような大国でもない。なんだか神秘的な匂い。どんなことになっているんだろう？ 行って確かめてみよう、となるわけだ。「スタンっていったい何？」ということで調べると、何語かはわからないが「大地」という意味があるらしい。

紀元前よりこの地域は、西からアレクサンドロス大王、東から唐、南からアラブ、北からチンギス・ハーン、ロシアなど、侵略に次ぐ侵略で壮絶な歴史を辿ってきたようだ。それにはシルクロードの真ん中にあるという地理的要因と、それによってここを制すれば莫大な富が得られるという背景があった。

現在、ヒマラヤにつながるパミール高原地帯では、国境が複雑に入り組んで常に緊張状態にあり、紛争も多い。大地は大地でも国境線でズタズタに引き裂かれた大地なのだ。

中央アジアの次に巡ったのが前述したコーカサス地方で、グルジア・テラヴィでは6~7世紀から残る教会を訪ねた。管理人以外誰もいないガラとした空間。壁にはキリストや聖者たちの姿があちらこちらに描かれているが、所々白くまだら模様になっている。壁がはがれ落ちたのか？ 管理人に尋ねると「ロシア人がペンキで白く塗ったんです」と。剥が

れたのではなく、塗りつぶされたのだ。終戦直後の日本の教科書を思い出した。昔、コーカサス山脈を越えてグルジアに攻め込んだロシア軍は、グルジア正教を許さなかったのだろう。強権の征服者としては、人の心をつかむ宗教を弾圧するのは常套だが、それにしても塗りつぶすなんて、荒っぼいというか、ずいぶん原始的な方法だ。踏み絵のほうが、残酷だがずっと詩的だと私は思う。

ヨーロッパは言うに及ばず、グルジアや隣接するアルメニア、アゼルバイジャン、チェチェン共和国、そしてウズベキスタンなど中央アジア、あるいは西と東の架け橋であるトルコなど、こういった国々は、さまざまな勢力に攻め込まれかつ攻め込み、常に過酷な歴史を背負ってきた。ちょっと飛んで中南米に目を移せば、インカ帝国やアステカ文明はスペインに攻め込まれ滅ぼされている。そういう歴史の傍らには常に「死」が隣り合わせだ。

歴史は重いなんて、当たり前と言え当たり前の話だが、日本でノホホンとダンスなどやっている身には到底思い至らないことだった。でもよくよく考えれば、ハデなドンパチだけが歴史ではないのだ。井戸に水を汲みに行く途中で近所の顔なじみとばったり会い、話し込むうちに雨になって、しかたなく近くの軒で雨宿り中、不意に顔を出した太陽が空に虹を照らし出し、そのあまりの美しさに見とれたまま家に帰って家族に報告したら、「水は？」と聞かれて井戸のことをすっかり忘れていたのに気付いた、そんなおぼあさんのなんでもない日常も、重い歴史の断片のひとつなのだ。

貧困と私

この旅で最も印象的だったのは、溢れるような猥雑、そして貧困だった。どの国に行っても、どんな都会でも田舎でも、物乞いを見かけない場所はなかった。子供が、老人が、若い母親が道ばたに座り込んでジッと片手を出している。誰かがそこにチャリンとコインを置く。午前中にその前を通り、夕方に通る時も、彼らはジッと同じ格好をしている。そこが高級ホテルの前であろうが、裏通りであろうが。今、日本でこういう光景にどれほど出くわすだろうか？



トルコ・イスタンブール。回旋舞踊

ある一度の例外を除き、旅の間じゅう、私はこういう物乞いにお金を渡すことはなかった。キリがないからだ。一介の旅行者に、何ができるのか？ それは本来私の仕事ではなく、その国の仕事ではないか？ そんなことをしたって、偽善じゃないか？

そうドライに割り切って考えていた私に、例外を起こさせたのは、これもやはりグルジアでの出来事だった。

トビリシ駅でアルメニア行きの切符を買うため窓口で手続きをしていると、駅を根城にしているらしき子供の乞食が数人寄ってきて、私の腕やリュックを引っぱって金をせびる。分厚いガラス板の向こうの、係員の聞き取りづらい英語を把握するだけでも面倒なのに、子供たちがあまりにしつこかったので、ついカットとなって日本語で「うささい！ 向こうに行け！」と、切符売場のホール全体に響き渡るくらい、自分でもびっくりするような大声で、怒鳴った。子供たちはしばらくブツブツ言っていたが、いつの間にかいなくなり、私も「やれやれ」と思っていた。

でも数日後、そのことをふと思い出して「しまった！」と思った。彼らが怒鳴られたのは、しつこかったからじゃない。貧しかったからだ。貧しいというだけで怒鳴られる。こんな理不尽があるのか？ しかも子供。グルジアに住むあの子たちの心に、遠い国から来た、目を剥いた鬼のような形相の私が、ザックリと刻み込まれたのだと思うと、無念でならない。夜、そんなことを思っただけでベッドに入ったら、涙が溢れた。

この出来事のあと、トビリシの道端で出会う物乞いに、コインを渡した。でもそれは、その国を出る際に余ったグルジア・リラで、その先持っていてもしょうがないモノだったからだ。お金は、使う人の手に渡らなければ意味をなさない。単なる経済活動をしたまで、とやはり割り切って考える私は、偽善にとらわれ過ぎた、素直じゃない人間なのか？

なににせよ、こういう光景や出来事は日本では、少なくとも東京神奈川近辺の私の生活範囲ではまず見かけない。駅前や繁華街はきちっと整備され、不純物の入り込む余地はない。入り込むもの

なら追い出される。そういう環境に慣れ親しんでいる私は、旅で出会う溢れるような猥雑にワクワクしつつも、紙のないトイレには閉口するのだ。

もちろん貧困はないほうがいいし、街はきれいに越したことはない。でも善し悪しの話をしているのではない。日本の現実と世界の現実にはこんなにギャップがある、と思い知らされたのだ。余計なものや見たくないもの、一見必要ではないものをいとも簡単に排除する。それが現代日本の流儀だ。アメリカという史上最大の文明国でさえ、街では浮浪者が闊歩しているのだ。このまま日本人は、猥雑に免疫を持たないまま生きていくのだろうか？

思いもよらない自己革命

バスや列車の窓に流れる砂漠や山脈。そんな風景を眺めていると、いろんなことを考え、思い出す。小さい頃、年に一回は家族旅行をしたなあ。保育園のころ、母の迎えの自転車が楽しみだったなあ。大学時代の友人が、一度だけ舞台を観に来てくれたなあ。ある日その彼と街で偶然バッタリ出くわしたなあ。ところでこのバス、時間通りに着くのか？ 宿は見つかるだろうか？ ひとり旅の不安や寂しさに襲われている時、過去の記憶をほじってその光景を思い出すと、少し楽になる。カッコよくいえば、「思い出を肴に、孤独を飲み干す」のである。

旅を続けるにつれ、しばらく疎遠だった人と会いたい、という気持ちが強くなった。家族、昔の友人、仲間。帰国後、まるで人が変わったように多くの人に会うようになった。しかも気さくに相手と打ち解ける自分がいた。孤独好きな身としては考えられないことだった。かなりフットワークが軽くなった気がする。

いったい私に何が起こったのだろうか？

この旅は、旅行というより修行に近いものがあつた。訪れる場所はどこも寒いし、日本語は通じないし、食べ物はずっこいし。「ああ、早く日本に帰りたい！」という思いはすでに2ヶ月目あたりから現れ始めた。もちろん旅そのものは刺激に満ちているが、日々を送るのはそれなりに辛いものだった。だが、だからこそ、そういう中で本物の自分が、アーティストとしてではなく人間としての自分が試されている気もした。

よくよく考えてみれば、この6カ月で私が見てきたのは、世界というよりも自分自身の姿だった。世界という鏡に己の姿を映すという、なんとも贅沢な旅。そしてそこには、ダンス以外何も知らない、それ以外何もできない自分が、ダンスの世界の狭さに気付かされた自分が、いたのだ。「ダンスに新鮮味を感じなくなった」と書いたが、それは自分のことだけでなくダンス全般に及びつつある。帰国後、人のダンス公演を観に行くと、愕然とすることがある。「あんなに手や足をいろいろ動かして、いったいあんなことして、何になるんだろう！」と。これはもう根本的な問題。「ダンスなんかしている場合じゃない！」というのが、今の正直な思いだ。「長期休暇でリフレッシュ」



モロッコ・サハラ砂漠。ラクダを引いた少年



ペルー・クスコの少女たちと

なんて、そんな生易しいものではなかった。

そこで「ダンスに限らず、他のこともやってみたい」という考えが生まれてきた。とはいえ、いきなりダンスをやめるほどの勇気はない。事実ずっとこれでメシを喰ってきたわけだし、関わってきてくれた人たちに突然「バイバイ」を言うほど冷酷じゃない。そこでまずこういう手段を選んだ。

未来の私

「伊藤キム+輝く未来」を、07年春より「輝く未来」と名称変更し、新たな形態で活動を開始する。活動の基本は「過去のカンパニー作品の再演」「新作発表」のふたつ。

これまでと違う点は「新作において伊藤キムは演出・振付けをせず、その役割をメンバーに託す」という点。私はカンパニー主宰者であり、ダンサーとしても活動するが、創作からは距離を置く。つまりメンバーが振付けをし、私はダンサーとしてその作品で踊る。私はいわば監修者的な立場となる。

方向転換の理由は、現在の私には創作意欲がないから。ただ、これまでの作品は上演し続け、カンパニーそのものは創作システムとして残していく必要があり、また同時に「自身の作品製作ではなく、ダンサーや振付家を育てることにスタンスを移したい」という考えにも基づいている。

私と私

このような「カンパニーの活動形態の修正」は、私にとっては最も身近な部分での方向転換だが、ダンス以外の新たな領域への挑戦に向けた布石に過ぎない。やはり、やりたくないことはやりたくない。

い。やりたいことだけを見つめていきたいのだ。

あの半年間で、私は変わったといえれば変わった。でも一方で根本的には変わっていない。そのどちらもが予想もしなかったことだし、刺激的だった。世界一周が私にもたらしたのは、アーティストとしての変化・成長というより、人間としてのそれだった。そしてやはり「自分に正直に生きる」ことがいかに大事か、人間としてもっとも大切かをあらためて教えてくれたような気がする。自分に正直にならなければ、いつかどこかで歪みをきたし、自分だけでなく結果的に周囲の人をも裏切ることになるのだ。

他人に嘘はつけても、自分にはつけない。ひょっとすると、私の「心のよりどころ」は、私自身なのかもしれない。



photo: 山口遊

振付家・ダンサー。1987年、舞踏家・古川あみずに師事。90年、ソロ活動を開始。95年、ダンスカンパニー「伊藤キム+輝く未来」を結成。96年、『生きたまま死んでいるヒトは死んだまま生きているのか?』でパノレ国際振付賞を受賞し、活動の場を海外にも広げ、その後は、ほぼ1年に1作品のペースで新作を発表。国内に加え、フランス・ドイツ・イギリス・スペイン・アルゼンチン・オランダ・アメリカ・カナダ・デンマーク等にて公演されている。作品では、根源的なテーマとして「日常の中の非日常性」を、風刺と独特のユーモアを交えて表現している。01年、海外から招聘したカウンターテナー歌手兼ダンサー2名と室内楽演奏家5名に振付・演出し、伊藤キム本人も出演した『Close the door, open your mouth』(製作:新国立劇場、カンパニー作品『激しい庭』(共同製作:世田谷パブリックシアター・びわ湖ホール)を発表し、第一回朝日舞台芸術賞において、清新な活躍を見せた個人・団体に送られる寺山修司賞を受賞。劇場内での公演に加え、03年より、『階段主義』と題し、『階段』という日常的な空間に身体を放り出すことをコンセプトに、パブリックスペースを活用した新たなダンス・パフォーマンスの演出を開始し、これまでに大阪、高知、神戸、東京、佐世保、広島、岩手の7都市にて公演した。05年、『愛地球博』の前夜祭パレードで総合演出をつとめる。白井剛氏とのデュオ『禁色』、カンパニー作品『未来の記』を発表。05年から06年にかけて、バックバックを背負って半年間の世界一周の旅に出る。

<http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Miyuki/3773/ima-top.html>

viewpoint

セゾン文化財団ニュースレター第36号

2006年8月20日発行

発行者: 財団法人セゾン文化財団

編集人: 片山正夫

発行所: 財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel.03-3535-5566 Fax.03-3535-5565

<http://www.saison.or.jp> foundation@saison.or.jp